

エルサルバドル 2009年

試される左派政党の政権運営の力量

田中 高

はじめに

エルサルバドルでは2009年1月18日、国会議員、地方首長選挙が、さらに3月15日、大統領選挙が実施された。その結果左派政党FMLN(ファラブンド・マルティ民族解放戦線：Frente Farabundo Martí para la Liberación Nacional)から出馬したカルロス・マウリシオ・フネス・カルタヘナ(Carlos Mauricio Funes Cartagena)候補が、有効投票の51.3%を獲得して大統領に就任した。これまで4代にわたって政権の座にあった右派政党ARENA(国民共和同盟：Alianza Republicana Nacionalista)は1992年の内戦終結後初めて、下野することとなった。

1980年代の地域紛争の代表的な事例となった中米紛争は、中米地峡だけでなく、米国とソ連(当時)の東西対立の代理戦争の様相を呈した。エルサルバドルだけでも犠牲者は7万5000人、経済的な損害は50億ドルに達すると推計されている。12年間に及んだ内戦の対立の原因が、「武装闘争による権力の奪取」をめぐるものであるとすれば、FMLNは戦場を「投票箱」に転換し、1992年の和平合意後17年を経て、合法的な権力の獲得に見事に成功したと言える。

本稿ではエルサルバドル政治史上画期的な出来事となった、今回のFMLN政権成立の背景について、2009年8月に行った現地調査の成果も踏まえ

て、検討することにした。本稿の構成は以下のとおりである。まず1992年の和平合意後の歴代政権と国会議員選挙の一連の流れを振り返ることにする。FMLNが着実に支持層を増加させてきた点は見逃せないものの、歴代のARENA政権はかなり高い支持率を得てきたし、サカ(Elias Antonio Saca González)前大統領に至っては退陣後も60%弱の支持率を誇り、国民の間での人気も依然として高い(大統領の連続再選は禁じられている)。

そのARENAがなぜFMLNのフネス候補に敗北したのか。後述のように世論調査によると、有権者は投票に際して、政党よりも候補者をより重視する傾向がある。そこで大統領候補者達の特徴などに焦点を当てて考えてみたい。減少傾向にあるものの、貧困層の占める割合は総人口の3割に達している。こうした経済問題と、治安情勢の悪化

といった今後の課題を述べた上で、サカ前大統領やクリスティアニ(Alfredo Felix Cristiani Burkard)元大統領が、ARENAの敗因をどのように分析し、新政権をどう見ているのか、筆者の行ったインタビューを紹介する。最後に、筆者がFMLN政権の発足により現地で身近に感じた変化のエピソードを紹介することで、結びに代えたい。

1 内戦後の選挙戦の様相

エルサルバドル内戦の終結と和平合意の成立の過程できわめて重要な選挙となったのは、1989年3月の大統領選挙である。このときPDC(キリスト教民主党: Partido Demócrata Cristiano)のドウアルテ(José Napoleón Duarte)大統領が1984年にスタートしたFMLNとの和平対話は中断し、内戦の様相は混迷を極めていた。FMLNは1980年に5つのゲリラグループが統合し結成された、左派武装ゲリラグループで、思想的にはマルクス・レーニン主義を標榜し、都市の中間層に支持基盤を持っていた。1980年代後半は、軍事的には政府軍が優勢ではあった。しかし1989年11月に首都サンサルバドルを中心に、FMLNの最終攻勢(ofensiva final)が実行され、左派ゲリラは都市機能をマヒさせる軍事力のあることを誇示した。大統領官邸周辺に数百人のゲリラ戦闘員が攻め入り、政府軍はヘリコ

当選したのはARENAのアルフレド・クリスティアニで、対立候補であったPDCのフィデル・チャベス・メナ(Fidel Chávez Mena)候補を20%弱の差をつけて打ち破った。ARENAは1981年、ロベルト・ダウウィソン(Roberto D'Aubuisson)元陸軍少佐によって設立された右翼的な政党で、富裕層が支持母体であった。発足時には、いわゆる右派テログループ「死の部隊」との関係も指摘されていた。農民層に支持基盤があった。

かつては政権政党の座にあり、社会民主主義の伝統的な有力政党であったPDCが、急速に弱体化するきっかけとなったのもこの選挙である。FMLNはこのときはまだ非合法のゲリラグループであり、政党としての資格を欠いていた。

ARENAはクリスティアニのもとで和平合意の成立(1992年)に成功し、12年間の内戦が終結した。国内では軍の実質的な解体や、治安組織と警察組織の分離、民主化などが精力的に進められた。経済面では国有企業の民営化や金融部門への政府の介入を弱める、一連の新自由主義的な改革が矢継ぎ早に導入された。ARENA政権も、内戦の主因が、膨大な貧困層の存在と極端な貧富の格差にあるという認識を持ち、社会経済改革に取り組んだ。

表1 エルサルバドル 歴代大統領(1984年～現在)

1984年	ホセ・ナポレオン・ドウアルテ	PDC(キリスト教民主党)
1989年	アルフレド・フェリックス・クリスティアニ・ブルカルド	ARENA(国民共和同盟)
1994年	アルマンド・カルデロン・ソル	ARENA
1999年	フランシスコ・フローレス・ベレス	ARENA
2004年	エリアス・アントニオ・サカ・ゴンサレス	ARENA
2009年	カルロス・マウリシオ・フネス・カルタヘナ	FMLN(ファラブンド・マルティ民族解放戦線)

(出所)筆者作成。

さて1994年の大統領選挙は、ARENAのアルマンド・カルデロン・ソル(Armando Calderón Sol)が得票率68.3%という空前の支持を集めた。カルデロン大統領は前職がサンサルバドル市長であった。FMLNはこのとき史上初めて合法政党として選挙戦に参加し、FMLNの政治・外交組織として知名度の高かったFDR(革命民主戦線: Frente Democrático Revolucionario)の流れをくむ、ルベン・サモラ(Rubén Zamora)を候補に担ぎあげた。サモラが国政選挙に出馬すること自体が、エルサルバドルの政治の流れを大きく変えるもので、国際的な関心も高かった。しかしある意味で内戦時代の情報統制のもとで、FMLNをマスコミがこぞってテロリストと呼んだことに象徴される、ゲリラアレルギーのようなものがまだ色濃く残る国内情勢では、十分に支持を伸ばすことはできなかった。

一方で注目すべきは、同日投票した国会議員選挙の結果である。FMLNは21議席を獲得しているのである。ARENAは39議席で、PDCは18議席である。かくしてFMLNは最初の国政選挙で、いきなり野党第一党に躍進したのである。

1999年の大統領選挙では、ARENAのフランシスコ・フローレス・ペレス(Francisco Flores Pérez)候補が51.9%の得票で大統領に当選した。FMLNからは、武装闘争時代の指揮官(FMLNを構成していた5つのゲリラグループのひとつである人民解放軍=FPLの出身)で、古参メンバーの一人であるファクンド・グアルダード(Facundo Guardado)が出馬した。グアルダード候補の得票率は30%にとどまっていた。他方投票率も低く、40%を下回っていた。ここで特記すべきことがある。グアルダードはその後、FMLNの強硬派との路線対立から離党する。そして数人の仲間と新しい政党、MR(刷新運動: Movimiento Renovador)を結成するのである。この内紛がもとでFMLNは都市部の中間層の

支持を失った、という指摘がある。

2004年の大統領選挙も、ARENAの優勢が続いた。メディアのコメンテーター出身で、知名度も高く、年齢も39歳と若いサカ候補が20%以上の大差で勝利した。FMLNからは武装闘争時代の中心的な人物で、党内の強硬派の代表格でもあったシャフィック・ホルヘ・ハンダル(Schafic Jorge Hándal)が出馬した。FMLNにとって、ARENAの候補者に連続して敗北したことが、2009年の大統領選への候補者選びの重要な反省材料になったと考えられる。過去2回、FMLNはゲリラ闘争時代の中心人物を大統領候補とした。他方国会議員選挙では2006年にはARENAの34議席に対して32議席と、ほぼ拮抗していた。議会議員選挙と大統領選挙の得票率が大きく乖離したため、FMLNは候補者の選出プロセスの大幅な見直しを迫られたと見られる。

2

2009年大統領選候補者達のプロフィール、国民へのアピール度

FMLNの最高幹部であったシャフィック・ハンダルは2006年死去した。おそらくこのことが、FMLNの権力構造、換言すると大統領候補選出プロセスにかなりの影響を与えたと想像できる。2009年大統領選挙の候補者選びの結果は、従来のパターンと様相を異にした。選出されたのは1959年生まれで、テレビ、ラジオで活躍するジャーナリスト マウリシオ・フネスであった。フネスはFMLNのもともとの綱領であるマルクス・レーニン主義とは縁もゆかりもない人物で、思想的には社会民主主義に近い。穏健な左派路線という表現が最も的確であろう。FMLNは党のイメージを刷新し、米国との協調に象徴される、より現実主義的な路線への転換に成功した。

政界の事情通の間では、フネス大統領夫人、バンダ・ギオマル・ピグナト(Vanda Guiomar Pignato)の影響を指摘する向きもある。ピグナト夫人はブラジル国籍で、ブラジルのルーラ大統領に近い人物でもあり、彼女の影響により、思想的にも「草の根民主主義」、「参加型の政治」というブラジル労働者党の政策を、エルサルバドルでも試行する可能性があるという指摘がある。ルーラ大統領は「飢餓ゼロ」、「ボルサファミリア」などの底辺層をターゲットにした社会政策で一定の成果を上げている。興味深いことにフネス大統領はピグナト夫人を大統領府に新設した、社会・市民統合担当大統領補佐官に任命した。どのような形で、ブラジル型のボトムアップを目指す社会政策が実施されるか、今後の動きが注目されている。

フネス候補(当時)は2007年12月には早くも米国を訪問し、政界関係者や、国務省のトマス・シャノン(Thomas Shannon)米州担当国務次官補などの有力者と会談した。サカ大統領時代には米国在住のエルサルバドル人の本国送還者数が7000人(2005年)から1万4000人(2006年)に、2007年には2万人に増加していると指摘し、ARENA政権の対米関係が必ずしも良好ではなかったというロジックで、政府批判を繰り広げた。フネス政権は対米協調路線をアピールすることに、今のところ成功しているようである。シャノン次官補は、大統領選でフネス勝利が確定した翌々日に、エルサルバドルを訪れて、フネス次期大統領、サカ大統領と個別に会談している。大統領就任式に列席したヒラリー・クリントン(Hillary Rodham Clinton)国務長官は、FMLNのイメージカラーである朱色のスーツ姿であったと報じられた。

大統領選のプロセスで、注目を集めたのはFMLNの副大統領候補となった、サルバドル・サンチェス・セレン(Salvador Sánchez Cerén)である。

サンチェス・セレン副大統領(教育大臣兼任)は1944年生まれ。内戦中はFMLNを構成する有力な武装ゲリラグループであるFPL(人民解放軍: las Fuerzas Populares de Liberación)の書記長であった。FMLNの主要なポストを歴任し、党内ナンバーリーの実力者として知られていた。テレビの司会者、コメンテーターやCNNスペイン語放送のエルサルバドル在住のレポーターとして知名度の高いフネス大統領とは、年齢、政治とのかかわりあい、FMLNでの活動歴など、ほとんど対照的な経歴の持ち主といつてよい。

FMLNの旧来の体質を代表するサンチェス・セレン副大統領の言動に、一部のマスコミは注目した。フネス大統領は一種の選挙戦術の結果としての国内外に向けた「顔」であり、政権運営、国会運営などの実質的な権力は、副大統領が掌握しているのではないかという見方がある。いわゆる二重権力の問題である。当選が確定した直後に、このテーマをめぐって、副大統領はマスコミとのインタビューで概要次のように発言している。

「(あなたは党のイデオロギーと利益を代表すると見られているが、というインタビュアーの質問に対して)私の立場はイデオロギーの擁護者ではない。私たちは最も虐げられ、社会的に排除された人々の利益と合致している。(党の政治局の指導に従属するのではないかという問いに)左派は現実の問題をうまく解決できない時に、大きな過ちを犯すものである。私を選出したのは党である。フネス候補は国民会議での集団的な意思決定で選出された。FMLNは強固な支持基盤を持つが、国民のすべてを代表するものではない。私たちはフネス候補が、党と党以外のさまざまな勢力を束ねることができると考えた。」

「私はFMLNが社会主義政党であることになんかの危険も感じていない。FMLNは民主的、革新的、

社会主義的な政党である。進んだ社会は複数政党制であり、あらゆる政党が機能している。重要なことは党の公約であり、そこには和平合意の内容も含まれている。あらゆる左派政党と同様、重要なテーマは政治局で議論する。フネス候補とも議論し、その上で広範な層の参加する政府を擁立する。政治局は、フネス大統領自身が閣僚を任命することを決定した。党は大統領と、閣僚ポストの取り引きはしない」。

「議会との関係は、話し合いと相互理解を基にしたものとしたい。従来、票を獲得するための買収活動などもあったが、国家と行政機関の尊厳を傷つけてきた。あらゆる政治勢力との話し合いで、必要な支持を得たい。84議席すべての票を得ることは、過半数の票を得ることと同一ではない。過半数の賛成で法が成立したからといって、国民全体の賛同を得ているわけではない。極力、議会全体の支持を得るようにしたい」。

「もし政府が法案を通過させるためにFMLNの議員を説得するにもかかわらず、党がこれに同意しない場合、あなたはどちらの立場に立つか、という質問に）FMLNのためではなく、国全体を治めることが、利益にかなう。いくつかの法案は、党内部で熱心に議論されるだろう。政府のプログラムは国益にかなったものであり、党の強い抵抗はないであろう。私の立場は、憲法に規定された役割に従うことである。FMLNが政府を独占することは、深刻な過ちとなろう」⁽¹⁾。

サンチェス・セレン副大統領のインタビューを若干長めに引用したのは、政権の実権はフネス大統領ではなく、副大統領を中心とするFMLNの政治局にあるのではないかと、という根強い指摘があるからである。その意味でインタビューは、いくつかの示唆的な内容を含んでいる。まずFMLNが社会主義政党であることを明確に認めている。社

会主義が、複数政党制のもとで、民主勢力として十全に機能できると述べている。社会主義的な国家運営を目指すのかどうかについては、明言していない。さらにフネス大統領を、党の候補者として選出した過程についても説明している。国民会議(Consejo Nacional)の集団的な決定であると述べている。サンチェス・セレン自身の指名は、政治局の意向であるとしている。

一方ARENAの大統領候補はロドリゴ・アビラ(Rodrigo Ávila)元PNC(国家文民警察:Policia Nacional Civil)長官であった。アビラ候補は1965年生まれで、米国で大学教育を終えた後、FBI(米国連邦捜査局)で研修を受けている。帰国後は警察官僚としてのキャリアをスタートし、1994年から1999年に長官を務め、さらに2000年から2003年には公安省の次官に就任、2006年に再度PNCの長官となった。アビラ候補を強く推したのは、サカ前大統領であると指摘され、その主たる理由は、彼の意のままになる人物であったからであると見られている。なおアビラ家は代々ARENAの創設に密接にかかわっていたようで、党の創設メンバーのうち7人が一族の関係者と伝えられている。

結果的には、フネス候補とアビラ候補とでは、国民に対するアピール度にかかなりの差があったようで、クリスティアーニ大統領は筆者とのインタビューで「相手が強すぎた」という感想を述べている(後述参照)。主要な日刊紙による世論調査によれば、FMLN支持の多くは大統領候補の人柄によるもので(25%)、公約を支持の理由とするのは14%にとどまっている。有権者はFMLNという党よりも、むしろフネス候補に投票したという傾向が強そうである。さらに投票を決める際に重要な点として上げているのは、政策、大統領候補の人柄、政党、イデオロギーの順であり、政党支持は意外に少ない⁽²⁾。

なおここで、首長選挙と国会議員選挙の結果を簡単に紹介する。まず長年にわたりFMLNが独占してきたサンサルバドル市長選挙で、ARENAにポストを譲るという出来事があった。再選を目指したFMLNのビオレタ・メンヒバル(Violeta Menjívar)市長の評判が芳しくなかったこと。当選したARENAのノルマン・キハノ(Norman Quijano)候補が、市内の交通渋滞の解決策として提案したメトロバス構想などが、有権者の支持を得たことなどが勝因とし指摘されている。

しかし国会議員選挙では、最大議席を有するARENAが2議席減らして32、FMLNは3議席増の35、PCN(国民融和党: Partido de Conciliación Nacional)は1議席増で11、PDCは1議席減で5、左派政党CD(民主改革: Cambio Democrático)は1議席となった。84議席の単純な過半数は42議席であり、いずれの政党も単独で法案を通過させる力はない。PCNは軍事政権時代からの保守政党である。PDCは中道左派勢力として位置づけられるが、議会でのFMLNとの協力関係は未知数である。その意味で、議会運営は不安定な状態が続くであろう。特に外国政府や国際機関との借款協定の国会の承認をめぐって、与野党が激しく攻防すると見られている。

3

サカ、クリスティアーニ両元大統領とのインタビュー

筆者は2009年8月、歴史的な敗北を期したARENAの2人の元大統領にインタビューする機会を得た⁽³⁾。「敗軍の将、兵を語らず」という言葉があるが、2人とも大変率直に今回の選挙戦の失敗を認め、その責任の所在も明らかにしている。そこでその概要をここで紹介することにしたい。

サカ前大統領とのインタビュー(8月13日木曜日、11:00~12:00、Grupo SAMIX本社)

選挙で敗北した後に、ARENAの幹部たちがFMLN政権の発足について危惧していた。私は「フネスにチャンスを与えたらどうか。エルサルバドルの政治は制度化することが大事で、政権交代もその主要な機能である」と説得した。フネスはニカラグアのオルテガやボリビアのモラレスとは違い、チャベスのようにはならないだろうし、そうなってほしくない。フネスの政治スタイルに最も近いのは、ブラジルのルーラ大統領の、穏健な左派政策であろう。フネスはFMLNの主流派であるオーソドックスな左派思想の強硬派とは一線を画していると思う。国民の多くは、フネスがゲリラ指揮官だった幹部たちと距離を置いていると判断して投票したのであろう。政権内部で、いずれ主導権をめぐる争いが出てくるだろう。

エルサルバドルの抱える大きな問題は、麻薬、組織犯罪であり、貧困層への経済的な支援も必要である。自分の政権期にはかなりの成果を収めたと考えているが、国民にはまだまだ不満があるようだ。FMLN政権が明確なビジョンを打ち出して、どのような対策を立てていくのか、注視しているところだが、今のところまだ見えてこない。ARENA政権からFMLN政権へと交代したこと自体は、民主主義の制度化の定着という観点で、意義があったと思う。

クリスティアーニ元大統領(現ARENA総裁)とのインタビュー(8月26日水曜日、9:30~10:40、Cristiani Burkard, S.A. de C.V. 本社)

今回の大統領選挙は、ARENAがFMLNに敗北したというよりも、むしろフネスの人気に敗れた

のだと考えている。FMLNの中枢を握っているゲリラ指揮官とは異なる経歴を持ち、知名度と人気の高いフネス候補を立てたことが、勝因である。しかしFMLNは政権内部の実権を握っていて、フネスが任命した経済閣僚以外は、閣僚ポストに多くのFMLNの幹部が就任している。フネス大統領は穏健な左派思想の持ち主だと思うが、FMLNの主要メンバーは古いタイプの社会主義路線をとる。

エルサルバドルは現在厳しい経済不況に直面し、海外からの送金は減少し、失業が増加している。財政赤字も深刻である。民間企業の投資を増やすには、政府との信頼関係が不可欠であるが、FMLN政権が有効な対策を打ち出しているとは思えない。政権発足後、フネス大統領はまだ一つの法令(decreto)も出していない。

今回の選挙戦の敗北は、われわれの責任である。ARENAは実効的かつ能率的な野党としての役割をこれから5年間担いたい。新鮮で若い指導者がぜひ必要であり、総裁としての自分の責務はそのような人物を探し出して、5年後に政権に返り咲くことだと考えている。ホンジュラスで起きているような、軍を使って大統領を国外に追放するようなやり方は、まったく容認できない。警察が大統領を逮捕して、法律的な判断に基づいて司法当局が身柄を拘束するなり、勾留することはありうるかもしれない。今回の大統領の追放という出来事は、自分には理解できない。

4 今後の課題 結びにかえて

エルサルバドルの直面する大きな問題は、改善しない経済情勢、悪化する治安であろう。前者については、マクロレベルではプラス成長を達成しているものの(主要経済指標は表2参照)、肝心の雇用環境は過去15年間の統計では若干改善された

が、2006年の不完全就業率は全国平均で40%を超えている⁽⁴⁾。主要な産業はサービス部門であり、GDP(国内総生産)の50%弱を占めている。そのなかでも流通業、ホテル、レストランなどのサービス産業が大半である。米国に在住する家族からの送金がGDPのおよそ17%を占めていて、米国の景気に大きく依存し、流入するドル貨で消費財を輸入する経済構造である。都市と農村の所得格差も顕著であり、バランスのとれた開発戦略が必要とされている。

エルサルバドル国民が懸念するもう一つの社会問題は治安の悪化である。人口10万人当たりの殺人件数は67.8人で、ラテンアメリカ全体の24.8人、中米全体の36.6人を大きく上回る⁽⁵⁾。その背景にあるのは、若者の失業率の高さであり、近年麻薬取引との関連が指摘され、マラス(maras)と呼ばれる若者のギャング集団の跋扈である。警察のパトロールの行き届かない地区にある個人商店などを訪れ「ショバ代」を請求し、払わない場合は簡単に店主を殺害する。米国から不法滞在などで国外追放された若者も多く、麻薬取引にも組織的に関わっている。サカ政権時代にはマラス対策の強化も打ち出されたが、期待された成果は上がらなかった。さらに近年では誘拐犯罪も増加傾向にあり、ターゲットが富裕層から中間層にまで拡大しているため、市民は神経を尖らせている。このような治安の悪化は、好転しない経済情勢と並んで、国民の不満の種であり、政府への優先順位の高い要望事項である。

これらの課題が克服困難なものであることは言うまでもない。しかし今回FMLN政権の発足がエルサルバドル社会に与えた変化を感じることがあった。エルサルバドルではラジオが有力なマスメディアである。たまたま筆者はラジオ局ミ・ヘンテ(Mi Gente)を聞いていたとき、MOP(公共事業

表2 エルサルバドル主要経済指標

	2004	2005	2006	2007
総人口(100万人)	6.6	6.7	6.8	6.9
国内総生産(GDP)成長率(%)	1.8	2.8	4.2	4.7
国民1人当たりGDP成長率(%)	0.1	1.3	2.5	3.0
輸出(100万ドル)	3,304.6	3,418.2	3,706.5	3,979.9
輸入(100万ドル)	6,328.9	6,689.6	7,670.6	8,676.6
消費者物価上昇率(%)	5.4	4.3	4.9	4.9
公的債務残高/GDP(%)	30.2	29.2	30.5	26.7
家族送金(100万ドル)	2,547.6	3,017.2	3,470.9	3,695.3
貧困*比率(全世帯に占める割合%)	34.6	35.2	30.7	

(出所) CEPAL, *El Salvador : Evolución Económica durante 2007 y perspectivas para 2008*; EIU, *Country Profile 2008 El Salvador*; Banco Central de Reserva (<http://www.bcr.gob.sv>) などから筆者作成。

(注) *日常生活を満足に維持できない生活水準。

省：Ministerio de Obras Públicas, Transporte, Vivienda y Desarrollo Urbano)大臣ヘルソン・マルティネス(Gerson Martínez)氏の話聞くことができた(8月26日, 14:00~15:00)。

大臣の話の内容に入る前に, 若干の説明が必要であろう。MOPはかねてより公共事業をめぐる民間企業との癒着の噂が絶えない官庁であった。フネス大統領はこの行政機関の長に, FMLNの生粋の党人であり, 国会議員として長年, 政府の汚職問題などに取り組んできたマルティネス氏を任命した。番組は聴取者からの電話によるマルティネス大臣への質問により構成されている。

トップバッターで電話にでた聴取者は, 国内第3の都市サン・ミゲルの住民で, 町中の橋の補修が遅れて, 大型トラックが通過するたびに, 近隣の住民が大変迷惑していると苦情を伝える。大臣は, MOPは一般の住民からの苦情を受け付ける窓口を, 自治体ごとに設けているので, そこに伝えてほしいと回答。次の苦情は, 道路工事と水道工事が同じ個所で何度も行われているというものだった。マルティネス大臣は, 歴代政権では,

ANDA(水道公社: Administración Nacional de Acueductos y Alcantarillados)とMOPとの間に, まったく調整機能が働いておらず, 無駄な工事を繰り返していたと指摘し, 解決したいと発言。東部のラ・ウニオン港の住民からは, 道路工事に使用された機材が故障したまま放置されていて, 早く修理して利用してほしいと要望があり, CEPA(港湾公団: Comisión Ejecutiva Portuaria Autónoma)と相談すると即答した。

聴取者からの電話で, 最後に紹介されたのは, 住宅に関するものだった。家族が住むには満足な家がなくて困っている。何とかならないだろうか, というものだった。MOPは公共事業を主体としながら, 運輸, 住宅, 都市開発について管轄する, 広範な権限を有する官庁である。大臣が最も熱心に説明したのは, この住宅問題だった。「もう少しでも収入があれば, 低金利の融資を受けることができるので申請してほしい。まったく収入がなくて, 家に困っているのなら, これから言う電話番号に相談してほしい。地域住民問題対策室(Unidad de Gestión Social y Comunitaria)を新しく設

置したところですよ。これが担当者の名前です。」

番組はインターネットでも中継されていたようで、オンタリオに住む元FMLN戦闘員からの激励のメッセージなども紹介された⁽⁶⁾。1時間ほどの番組の最後に、マルティネス大臣は次のように語った。「ミ・ヘンテのようなラジオ局は、私たちの声を直接届けてくれる数少ないマスメディアです。長い間私たちは、このような形でみなさんと直接対話できる機会に恵まれませんでした。これから今日のようなコミュニケーションの場を、継続して持ちたいと思います。」

偶然聞いたこのラジオ番組は、エルサルバドルに新しい政治の流れが確実に生まれていることを実感させてくれた。汚職の噂が絶えなかったMOPの大臣が、ラジオ番組に生出演して、聴取者の質問に答えるといったことが、これまでにどのくらいあったのかは承知していない。しかし殺到する電話とこれを処理しながらまとめる番組の司会者の奮闘ぶり、冷静に一つ一つの質問に答える大臣の姿勢に、従来にはなかった政治のスタイルを看取することができた⁽⁷⁾。

首都郊外のスラムの窮状を見るにつけ、いくつかの経済指標には若干の改善がみられるものの、まだまだ貧困層の底上げには、不十分であると感じざるをえない。サカ大統領時代に実施した地方住民との直接対話のプログラムである「連帯ネットワーク(red solidaria)」は好評を博した。しかしそれが省庁の末端レベルでどのくらい行きわたっていたかは判然としない。幸いエルサルバドルは、ニカラグアのように、元大統領が大規模な汚職事件の渦中の人物となり、長期間自宅軟禁状態に置かれたり、ホンジュラスのように、現職の大統領を軍が突然強制連行して国外に追放するといった蛮行は起きていない。その意味で民主主義は制度化されているといえる。フネス政権が国民の声に、

これからの5年間どのように応えていくのか、注視したい。

注

- (1) *Envío*, May 2009.
- (2) 各種世論調査の詳細については、佐藤 [2009] を参照。なお同報告書はラテンアメリカ協会のホームページ (<http://www.latin-america.jp/>) からダウンロード可能である。
- (3) インタビューの実現には、在エルサルバドル日本大使館の丸橋重友書記官のお世話になった。この場をお借りしてお礼申し上げたい。
- (4) PNUD [2008] による。
- (5) 同上書による。
- (6) 同局のホームページは<http://migenteinforma.org/>である。時間帯によって、ラジオ放送をインターネットでも同時に放送している。
- (7) MOPのホームページによると、就任後100日間に、マルティネス大臣は64回、地方での住民との直接対話集会に出席した。この間MOPが住民から受けた相談件数は、221件であった (<http://www.mop.gob.sv/>)。

参考文献

日本語文献

- 佐藤香子 [2009] 「新政権の誕生 ARENA 政権 20年の経済・社会動向と新政権の課題」
 田中高 [2005] 「内戦後の平和構築をいかに進めるか エルサルバドルの事例研究」(独立行政法人国際協力機構客員研究員報告書)
 細野昭雄・田中高編 [近刊] 『エルサルバドルを知るための55章』明石書店。

外国語文献

- PNUD [2008] *Informe sobre Desarrollo Humano El Salvador 2007~2008*.
 Sánchez Cerén, Salvador [2009] *Con Sueños se Escribe la Vida*, Ocean Sur.

(たなか・たかし / 中部大学国際関係学部教授)